

葉の裂片の形によるスハマソウとミスミソウとの区別は中間形があつて余りはつきりしない。また葉の上面にまで毛のある形は4倍体に多いが例外もあり、東北地方の東側や美濃には毛の多い2倍体がある。朝鮮、満州のものはすべて葉の上面にも毛があるが花粉は3溝粒で2倍体である可能性が高い。この類中最も大形な露陵島産のオオスハマソウはよい種であり、花粉は3溝粒である。

なおスハマソウと欧州産との関係、北米産との比較、*Hepatica* を別属とするかどうかの問題などについても論及した。

終に本研究に対し色々助言して下さいた久内清孝先生、田中信徳、幾瀬マサ両博士並びに資料の採集に協力して下さいた小川由一、富樫誠、阿部近一、鳥居喜一、井波一雄、森邦彦の諸氏に厚く御礼を申し上げる。

○ブタクサとオオニシキソウ佐渡にもある (久内 清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Aliens in Island Sado.

今年の夏幾瀬マサ氏が佐渡の南部で採集して来たもののうちにブタクサとオオニシキソウとがあつた。両者共、同島南部の腰細でヒメコバンソウと共に採集したものだという、現地の人はもちろん知っているのであろうが、一般にはあまり知られていない事実と思い帰化植物散布の例として記しておく。まさに、これ等の雑草も佐渡へ佐渡へと運び来たのであろうが、渡島の経路は知るよしもない。その後同島在住の北見秀夫氏に照会したところ昭和27年に採集の折りには見なかつたとのことであるから其後渡島したものと考えられる。

○ユキワリソウ余話 (久内 清孝) Kiyotaka HISAUCHI: A vanacular name of *Scopolia japonica* Max.

サクラのさく頃になると、東京都下奥多摩の山間でユキワリソウの中毒事件が新聞の種となる。同地方で、この名で呼ぶものはサクラソウ科やウマノアシガタ科のものとは別物のナス科のハシリドコロのことであつて、たべれば中毒するのが当然であるが、この草がこんな名で呼ばれるのは今はじまつたものでないらしい。著者は不詳となつているが寛延二年(1749)に刊行された薪著聞集という随筆の第十八に次のような記事がある。

「寛文七年間三月すへの八日に、信州諏訪のもの、野に出て草をつみ、あつものにして喰より、謔語をいひ、物つきの様にて、十日ばかり過ぎて本復しぬ。ある者のいはく、八年以前に、同州の芹が沢で雪わりといへる草を食して、酒に酔たるがごとくありしとぞ。その草しらまほし。いうまでもなく症状からおしてハシリドコロである。そうしてこの記事から見ても、この草をユキワリソウと呼ぶ方言が山地にあることを物語っている。文中「酒に酔たるが如く」というのは、分量により起る現象でこの草はもちろん、同様の成分を含むチヨウセンアサガオの中毒においても同一であつて後者の中毒や、これを応用した悪盗賊のことが百井塘雨という人の笈埃隨筆という(文化年間の刊行)本に見られる。それは兎に角ハシリドコロをユキワリソウということ、また食べると中毒することは古くからわかつていたにかゝらず今なをくり返されるとは遺かんなことである。